九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アスペクト研究方法試論

木部, 暢子
純真女子短大講師

https://doi.org/10.15017/10487

出版情報：文獻探究. 13, pp.10-16, 1983-12-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

アスペクト研究方法試論

木部　暢子

最近は、アスペクト研究が大はやりである。学会等の研究発表会でもアスペクトの問題が必ずいくつか取りあげられる。かく申す私も、「方言のアスペクト」と題して卑見を発表したことがある（第33回西日本国語国文学会研究発表会、昭和58年10月9日、於佐賀大学）。

西日本方言の大部分は、東日本のシテイルに対しショルとシトルとの二つの形式を持っている（地域によってはシタルとシテル、シヤルとシタル[注1]など）。例えば以下のように。

（完了）その本はもう読んでいる。―― その本はもう読んどる。

（進行）その本はいま読んでいる。――その本はいま読みよる。

このような西日本方言を対称としたアスペクトの研究には、

辰浜マリ子「相生方言のアスペクト―「居る」・「て居る」について―」（『都大論究』14 昭和52年）

工藤真由美「宇和島方言のアスペクト」（『国文学解釈と鑑賞』48-6 昭和58年）

丹羽一彌「トル・ヨル考」（『東海学園国語国文』11 昭和52年）

などの卓論考があるが、私もショルとシトルを持つ方言（北九州方言）の話者として、この問題を考えてみたいと思ったのである。ただし私の発表は、上記の三人のような精密なものではなく、内省を主としたごく大雑把なものであった。しかし、大雑把は大雑把なりに、――特にアスペクトなどという微妙な問題では――その方がよいこともあるのではないかと思い、まとめてみることにした。

アスペクトは、國廣哲彌氏の言われるように[注2]、文法的アスペクトと語義的アスペクトとに分けるのがよいと思う。文法的アスペクトとは、ヨル、トルなどのように「外形上はっきりと区別のある」アスペクトのことであり、語義的アスペクトとは、動詞の「語義の内部に含まれている」アスペクトのことである。実際には両者が結合し合って複雑な様相を呈しているのだが、ある現象が、文法的アスペクトの問題なのか語義的アスペクトの問題なのか、見分ける必要がある。

また、従来のアスペクト研究はシテイル形式のみを取り扱っていたが、アスペクトはスルとシテイルの対立関係の中で体系をなしているということが、奥田靖雄氏によって提唱された[注3]。

両者の考えを合わせると、西日本方言のアスペクトの研究の取るべき方法が明らかになるだろう。すなわち①ショル、シトル、スル、シタ、ショッタ、シトッタのそれぞれの形の対立（非対立）関係を、②文法的アスペクトと語義的アスペクトの両面から整理する、という方法である。以下に北九州方言をベースにしながら、相生・宇和島両方言も考慮しつつ、アスペクト記述の試みをやってみたい。

（注1）都竹通年雄「全国方言のテンスとアスペクトについて」（『言語生活』342、昭和55年）に依った。

（注2）國廣哲彌「日本語・英語」（『講座日本語学』11 昭和57年10月）

（注3）奥田靖雄「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」（『日本語研究の方法』）
同　「アスペクトの研究をめぐって」上・下（『教育国語』53・54 昭和53年）

A 文法的アスペクト

(1) シヨル ── シトル

シヨルとシトルは基本的に対立を持つが、時によって対立をなくすことがある。

① 窓をあけヨル / 窓をあけトル　② 服を着ヨル / 服を着トル　③ 学校に行きヨル / 学校に行っトル

④ ごはんを食べヨル / ごはんを食べトル　⑤ プールで泳ぎヨル / プールで泳いドル　⑥ 飛行機が飛びヨル / 飛行機が飛んドル

①、②、③ではシヨルとシトルが対立をなくすことはない。シヨルとシトルによって表わされる意味はそれぞれ〈動作の継続〉〈結果の継続〉(注4)である。④、⑤、⑥では、基本的にはシヨルとシトルが対立するが、場面によっては対立をなくすことがある。対立を保つのは、シトル形式が、ある結果的事実をふまえている時である。例えば、④では茶碗がからになっている、⑤では髪が濡れている、⑥では飛行機雲ができている、など。そのような結果的事実のない場合にはシトルは動作の継続を表わすことがあり、動作の継続において対立が中和される。

⑦ 今ごはん食べヨル / 今ごはん食べトル　⑧ 今ごはん食べヨル / もうごはん食べトル

⑦は対立をなさないが、⑧では「もう」によって結果的事実が表わされるので対立を保つ。

シヨルとシトルの対立がなくなることのあるのは、動詞の語義的アスペクトによる。動詞は一般に、動作の側面と変化の側面の二側面を持つと考えられるが、シヨルとシトルの対立がなくなりやすいのは、その二側面の間に瞭然たる区別のつけにくい場合である。①～③の「あける、着る、行く」では、それぞれの動作を行なうことによって主体あるいは客体に変化がはっきり現れる。「あける」では、それまで閉まっていた窓(客体)が「あける」という動作のあとでは変化を受け、その変化の痕跡が窓(客体)にありありと残る。ところが、④～⑥の「食べる、泳ぐ、飛ぶ」では、変化の結果が常に主体や客体にありありと残るとは限らない。「食べる」という動作のあとで、先のように茶碗がからになるという変化の残ることもあるが、「食べる」動作の主体には、動作の痕跡の残らないことも多いだろう。このような場合には、シトルはシヨルとの対立を失って、シヨルと同じく動作の継続をあらわすことになる。

文法的アスペクト
- ヨル----動作の側面に呼応して〈動作の継続〉を表わす。
- トル----変化の結果の側面に呼応して〈結果の継続〉を表わす。

語義的アスペクト
- あける、着る、行く etc ----動作と結果の二側面を持ち、結果が事実として顕在する(「結果動詞」と呼ぶ)。
- 食べる、泳ぐ、飛ぶ etc ----動作と結果の二側面を持つが(注4)、結果が事実として顕在しないこともある(「動作動詞」と呼ぶ)。

(2) スル ── シタ

スルとシタについては、これをテンスと考える立場とアスペクトと考える立場とテンス、アスペクトの両方と考える立場とがあるが、いちおうアスペクトとして整理してみる。

スルとシタは対立を持ち、動詞の種類がどのようなものであっても、対立が中和するようなことはない。

(注4) 奥田靖雄前掲論文によった。

⑨ 窓をあけル / 窓をあけタ　⑩ 服を着ル / 服を着タ　⑪ 学校に行ク / 学校に行っタ

⑫ ごはんを食べル / ごはんを食べタ　⑬ プールで泳グ / プールで泳いダ　⑭ 飛行機が飛ブ / 飛行機が飛んダ

スルで表わされるのは、〈動作の未完了〉であり、シタで表わされるのは、〈動作の完了〉である。

(3) シヨル ── スル

シヨルとスルは、動詞の動作を〈継続〉として表わすか〈ひと纏まり〉のこととして表わすか、という点で対立している。例えば、次の⑮ ～ ⑳は、シヨルが動作の進行の過程を問題とするのに対し、スルの方はその進行過程を問題とせず、動作をいわば巨視的にながめた表現である。

⑮ 窓をあけル / 窓をあけヨル　⑯ 服を着ル / 服を着ヨル　⑰ 学校に行ク / 学校に行きヨル

⑱ ごはんを食べル / ごはんを食べヨル　⑲ プールで泳グ / プールで泳ぎヨル　⑳ 飛行機が飛ブ / 飛行機が飛びヨル

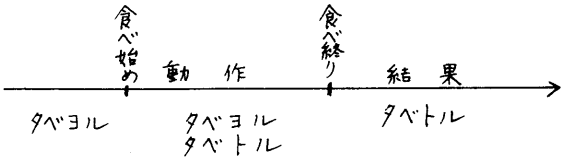
一方、スルはシタとの関係において〈未完了〉を表わし、シヨルはシトルとの関係において〈動作の継続〉を表わすのであった。完了とは動作が終わってしまったことであるから、当然そこには結果が期待されよう。未完了とは動作が終わらないうちであるから、動作が続いていることが期待されよう。とすれば、〈完了〉と〈動作の結果の継続〉、〈未完了〉と〈動作の継続〉は互いに対応しているということに気づく。つまり、

〈継続〉　〈ひと纏まり〉
〈動作〉シヨル ──── スル〈未完了〉
〈結果〉シトル ──── シタ〈完了〉

のような関係でこの四語は対立し合っているのだと考えられる。

ところで、スルとシヨルはともに動作の開始以前を表わすこともある。これも上図のように、スルとシヨルがスル ── シタ、シヨル ── シトルという対立関係の中で、それぞれく未完了〉〈動作の継続〉を表わすからに他ならない。動作の開始以前は、当然〈未完了〉〈動作の継続〉の側に属するからである。ところが、これに関して次のような事実がある。

動作動詞にヨルとトルが続いた場合に、ある場面では「食べヨル」と「食べトル」の対立がなくなることは(1)で述べたが、じつはこの対立の中和は、動作開始以前にまでは及ばないのである。「食べヨル」は動作の継続を表わすと同時に「まだ食べ始めてはいないがまさに食べようとしている」意を表わすが、「食べトル」は動作の継続は表わすが、「まだ食べ始めていないが云々」の意味を表わさない。仮りに図示すると、



のようになって、動作の開始を基準として、タベヨルとタベトルとが対立しているように見える。しかし、動作の開始は、アスペクト上それほど重要な要素ではないと思う。それよりももっと重要なのは、完了 ── 未完了の対立であり、動作の継続 ── 結果の継続の対立である

と思う。何故ならば、〈完了と未完了〉が常にスルーシタで区別され、〈動作の継続と結果の継続〉が――ある場面では中和されることはあるものの――シヨルとシトルで区別されるのに対し、〈開始以前と開始以後〉はそれを区別する文法的アスペクト形式を持たず、〈未完了〉〈動作の継続〉を表わす形式で兼ねられているからである。動作の開始以前――開始以後に着目すれば、シヨル―シトルの対立関係が成立しそうに見えるが、これは〈動作の継続――結果の継続〉の対立が動詞（食べる）の影響で一段階左にずれたためで、語義的アスペクトの問題なのである。げんに結果動詞（あける）の場合には、動作の開始以前――開始以後の対立は見られないのだから、文法的アスペクトの問題とは言えない。

(4) シトル――シタ

(3)で述べたとおり、シトルとシタとは、動作がすでに終わってしまったことを表わす点で共通しているが、そのことを〈結果の継続〉として表わすか〈ひと纏まり〉のこととして巨視的にとらえるかという点で対立している。

㉑ その本は読んドル / その本は読んダ　　㉒ 窓をあけトル / 窓をあけタ

「読んドル」では、その本の内容が身についている（結果の継続）ことが必要であり、「あけトル」では、窓があいた状態にあること（結果の継続）が必要である。しかし「読んダ」「あけタ」ではそのようなことは問題とはならない。ただ単に「読む」ことが完了し、「あける」ことが完了してさえいればよい。

(5) 派生的意味 (1)（反復習慣、経験）

ところで、アスペクトと言えば上記のような意味の他に、反復習慣と経験の用法が問題とされるのがふつうである。すでに鈴木重幸氏によって、反復は進行（ここで言う動作の継続）の派生的用法であり、経験は結果の派生的用法であることが指摘されている。(注5)

㉓ 毎日窓をあけル / 毎日窓をあけヨル　　㉔ 去年沖縄に行っタ / 去年沖縄に行っトル（行ってしまって、沖縄に住んでいるのではない）

㉓，㉔のように、シヨルのみでなくスルも反復習慣を表わし、シトルのみでなくシタも経験を表わすので、反復習慣は〈動作の継続〉〈未完了〉の派生であり、経験は〈結果の継続〉〈完了〉の派生であると言ってよい。従って、動作動詞ではシトル形式でも反復習慣を表わすことができる。次の例はいずれも反復習慣。

㉕ 毎日ごはんを食べヨル / 毎日ごはんを食べトル　　㉖ 毎日プールで泳ぎヨル / 毎日プールで泳いドル　　㉗ 毎日飛行機が飛びヨル / 毎日飛行機が飛んドル

(6) シヨッタ――シトッタ

アスペクトに関する形式で、ここにもう二種類シヨッタ、シトッタというものがある。この二つは一見、スル―シタの関係と平行的にシヨル―シヨッタ，シトル―シトッタという対立関係を持ちそうに見える。ところがそうではない。

㉘ 服を着ヨル / 服を着ヨッタ　　㉙ 毎日同じ服を着ヨル / 毎日同じ服を着ヨッタ　　㉚ 服を着トル / 服を着トッタ　　㉛ 毎日同じ服を着トル / 毎日同じ服を着トッタ

㉘の「服を着ヨッタ」は、「服を着ヨル」という〈動作の継続〉が〈完了〉した意味ではなく、〈動作の継続〉を〈経験〉として表わす用法であって、〈未完了――完了〉の対立ではない。〈動作の継続――その経験〉という対立なのである。次の例を見ていただきたい。

（注5）鈴木重幸『日本語文法・形態論』（むぎ書房）

A：Cさん何(なに)シヨルと？

B：服着ヨッタけど、まだ着ヨルかもしれん。

これは、出発の時刻が来ているのにCさんが現われないという場面を想像していただきたい。Aの「シヨル」とBの「着ヨル」は〈動作の継続〉、Bの「着ヨッタ」はCの「着る」動作の〈継続〉を〈経験〉したことであって、それが完了したことではない。

ちなみに、状態性の動詞や形容詞に続くタは過去であって完了ではない――すなわちテンスであってアスペクトではない――というのが一般的な理解だろう。従ってこの着ヨッタも、過去だと考えることもできるだろう。しかし私は、このようなタもアスペクトと考え、〈経験〉――すなわち完了の派生的用法――と見る。

㉜ 海は青イ / 海は青かッタ　㉝ 私は淋しイ / 私は淋しかッタ　㉞ 机の上に本があル / 机の上に本があッタ

の「青かッタ」「淋しかッタ」「あッタ」は過去と言うより〈経験〉の表現なのではないだろうか。

㉙では、〈反復習慣――その経験〉、㉚、㉛では〈結果の継続――その経験〉という対立関係がある。従って、「毎日同じ服を着ヨッタ」と「毎日同じ服を着トッタ」は、どちらも〈経験〉の表現であることでは共通しているが、「毎日同じ服を着る」という動作を〈反復習慣〉として表現するか〈結果の継続〉として表現するか、という点で異なっている。

（7）派生的意味（2）（開始以前の経験）

さきのシヨッタでは、さらに派生的意味が加わる。「人の服着ヨッタ」と言えば、〈動作の経験〉（あるいは〈習慣の経験〉）の他に「もう少しで他人の服を着るところだったが、着なかった」という意味を表わす。これは、動作開始以前の意を表わすシヨルに〈経験〉のタが付いたものだと考えられる。動作開始以前のことを経験したのだから、当然その動作は行なわれることなしに済んだのである。

シトッタにはもちろんこの用法はない。開始以前を表わすもう一つのスルには、「人の服着ルとこ やッタ」のように、「連体形＋とこ＋やッタ」の形でシヨッタと同じような意味を表わす用法がある。

以上をまとめると、次の図のように対立関係を示すことができる。

〈継続〉　〈ひと纏まり〉（派生的意味）

シヨル――――スル-----（開始以前，反復習慣）
〈動作〉　〈未完了〉

シトル――――シタ-----（経験）
〈結果〉　〈完了〉

東日本方言では、上図のシヨル，シトルに対応する形式がシテイルひとつになり、シヨッタシトッタに対応する形式がシテイタひとつになると考えられるが、シテアルという形式の位置がまだよくわからない。共通語のシテアルには、西日本方言のシトルが対応しそうだが（窓があけテアル――窓があいトル）、共通語のテアルは自動詞には続かないので、その点トルとは根本的に違いそうである。

B 語義的アスペクト

先にも述べたように、語義的アスペクトとは、動詞の語義の問題である。従来は「継続動詞」「瞬間動詞」「状態動詞」などの用語が使われてきたが、これは動作の時間的側面に注目した命名であった。しかし、西日本方言では、動作に費やす時間の長短よりも、変化の結果がアスペクトを区別する上で重要である。「食べヨル」時間よりも「死にヨル」時間の方が長くかかることもある。そこで「結果動詞」「動作動詞」ということばを使うことにする。

語義的アスペクトは、動詞の語義のみで整理してもよいが、実際は文法的アスペクトと協調、反発しながらアスペクト表現を作りあげていくのだから、文法的アスペクトとの関係の中でとらえていくのがよいだろう。スル── シタでは、どのような動詞でも対立が中和したりすることがなかったので、シヨル── シトルを利用するのがよいようである。

A. シヨル、シトル両形式を持つ。

a、シヨルとシトルが常に対立する。……動作の側面と結果の側面の二面性を持ち、結果が事実として顕現する ……「結果動詞」

（辰浜氏のA-1, A-2、工藤氏のA1 にほぼ相当）

b、シヨルとシトルが基本的に対立するが、対立が中和することもある。……動作の側面と結果の側面の二面性を持つが、結果が事実として必ずしも顕現しない。---「動作動詞」

（辰浜氏のA-3，工藤氏のA2 にほぼ相当）

c、シヨルとシトルが基本的に対立しない。----動作の側面と結果の側面の二面性を持つが、動作と結果が連続していて切り離せない。 ----「状態性動詞」(注6)

（辰浜氏のA-4，工藤氏のBに相当）

B. シトル形式のみでシヨル形式を持たない。----動作の側面を持たず、結果の側面のみを持つ。---「状態動詞」

（辰浜氏のB，工藤氏のC(ii)に相当する）

C シヨル形式のみでシトル形式を持たない。---- 結果の側面を持たず、動作の側面のみを持つ。

（辰浜氏のC，工藤氏のC(i)に相当）

D シヨル、シトル両形式を持たない。----動作の側面も結果の側面も持たない。

辰浜氏、工藤氏の御報告とダブる部分もかなりあるが、動詞の所属に多少の出入りがあるので、次に北九州方言の動詞の分類表をあげておく。

A. a（結果動詞）……辰浜A-1, A2、工藤A1

上(あ)がる、開(あ)く、開ける、上げる、集まる、集める、洗う（工藤A2）、行く、入れる、植える、植わる、浮かす、浮く、埋(う)まる、埋(う)める、産む、起きる、置く、送る、起こす、落ちる、落とす、溺れる、降りる、折る、折れる、降ろす、終る、買う、変える、帰る、掛かる、掛ける、欠ける、貸す、勝つ、かぶる、借りる、借る、乾かす、乾く、変わる、消える、着る、切る、切れる、配る、来る、消す、結婚する、こける（転倒）、殺す、壊す、壊れる、下(さ)がる、咲く、下(さ)げる、覚ます、覚める、敷く、沈む、沈める、死ぬ、閉(し)まる、閉める、調べる、進む、捨てる、座る、染まる、染める、倒す、倒れる、抱(だ)く

（注6）工藤真由美氏前掲論文によった。

炊く、炊ける、出す、立つ、建つ、建てる、散る、捕まえる、掴む、付く、突く、作る、付ける、包む、出来る、出る、溶かす、溶ける、解く、止まる、止める、取る、取れる、なおす（片附ける）、直る、並ぶ、並べる、逃げる、縫う、抜く、脱ぐ、温もる、抜ける、脱げる、濡らす、濡れる、塗る、寝る、載せる、上る、乗る、入る、運ぶ、始まる、始める、外す、外れる、離れる、払う、腫れる（辰浜A-3）、掃く、冷える、拾う、減す（辰浜A-3）、減る、干す（辰浜A-3）、堀る、曲がる、蒔く、巻く、負ける、曲げる、混ざる、混じる、混ぜる、見つかる、見つける、結ぶ、もらう、焼く、焼ける、破ける、破る、破れる、止む、止める、やる、汚す、汚れる、沸かす、沸く、忘れる（辰浜A-3）、渡す、渡る、割る、割れる、

A,b（動作動詞）----- 辰浜A-3、工藤A2

遊ぶ、あばれる、歩く、動かす、動く、歌う、売る（辰浜A-2、工藤A1）、運転する、押す、踊る、泳ぐ、書く（辰浜A-2）、数える、噛む、聞く、蹴る、こする、しゃべる、滑べる、吸う（辰浜A-2）、食べる、たたく、使う、釣る、通る、どなる、飛ばす、飛ぶ、流す、流れる、泣く、なぐる、投げる、なでる、なめる、温める（工藤A1）、ねぶる（なめる）、のぞく、飲む、這う、討る、走る、はたく、働く、話す、はねる、ひっかく、ひっぱる、冷やす、拭く、吹く、踏む、振る、降る、回す、回る、見る、燃える、燃やす（辰浜A2）、休む（工藤B）、言う、揺らす、揺れる（辰浜A-4）、読む（辰浜A-2）

A,c（情態性動詞）------ 辰浜A-4、工藤B

あきれる、甘える、あわてる、疑う、憎む、遠慮する、思う（辰浜A-3）、怒る、かわいがる、感じる、嫌う、困る、こわがる、淋しがる、心配する、すねる、つき合う、悩む（辰浜A-3）、にらむ、ひがむ、びっくりする、迷う、弱る、喜ぶ、笑う（工藤A2）ある（辰浜C、工藤C(i)）、見える（辰浜C）

B、（状態動詞）---- 辰浜B、工藤C(ii)

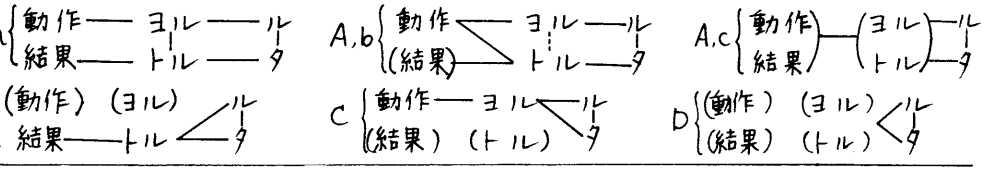
ありふれる、要る（辰浜A-2）、知る、好く（工藤B）、住む（工藤B）、にやける、似る、待つ（辰浜A-4，工藤B）

C、なし

D、

おる（工藤C(i)）、～すぎる（熱すぎる、高すぎる）（辰浜A-4，工藤B）

辰浜氏、工藤氏のものとかなりの出入りがある（下線を引いた語）。特にB、C、Dと下がるにつれて、所属語彙の一致が少なくなっている。また、A,bとA,cとの区別は微妙であって、「あきれトル、甘えトル、あわてトル----」は、「あきれる、甘える、あわてる----」という動作が継続しているのか、その結果が継続しているのか、判断しかねる。A,bとA,cとは分けられないのかもしれない。ヨルとトルとの関係を下に示してみる。



〈前号訂正〉前号（12号）の拙稿「用言の活用形とアクセント」に次の誤りがありました。お詫びして訂正します。 65頁(6)ナガラの項目のヨミナガラ（誤）→ナキナガラ（正）